

〔報告〕

## ストーマを造設した患者のボディ・イメージに関する文献検討

政岡 敦子, 大森 美津子, 西村 美穂

香川大学医学部看護学科

### Review of studies on the body images of ostomy patients

Atsuko Masaoka, Mitsuko Oomori, Miho Nishimura

*School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University*

#### 要旨

ストーマを造設した患者のボディ・イメージを先行文献から明らかにすることを目的とし、過去20年間の文献検討を行った。医学中央雑誌WEBを用い、1993～2012年で検索語「人工肛門造設術」に「心理」or「適応」or「受容」or「体験」を掛け合わせ、看護文献、原著論文に限定した。検索された文献のうち、消化管ストーマ造設患者を対象とし、対象者の言葉で、身体の変現に関する記述内容がある文献13件を選定した。文献から、身体の変現に関する記述箇所を抽出した。さらに、現象学的視点を踏まえ、抽出した記述内容に表れていることを中心に、研究者が感じたことや、記述内容の解釈と合わせて具体的な身体のイメージを表した。そして、具体的な身体のイメージの同類性により類型化し、ストーマを造設した患者のボディ・イメージとした。倫理的配慮は、文献からの引用は原典から行い、文献の出典を明らかにした。

分析の結果、ストーマを造設した患者のボディ・イメージは、《違和感を生み出す身体》、《拒みたいが拒めない身体》、《閉ざされる身体》、《ストーマに縛られる身体》、《ストーマで区別される身体》、《脆さを感じさせる身体》、《女性性が脅かされる身体》、《生を感じられる身体》であった。

ストーマを造設した患者は、否定的な経験の中で身体感覚を通して、身体と自分は切り離せないことを再確認できると考える。そして自らの生を感じることができた時に、肯定的に生きることができると考えられる。

ストーマを造設した患者のボディ・イメージは、身体と自分のつながりを感じるものであり、一部は、自らの生を感じるものであった。

キーワード：ストーマ, ボディ・イメージ, 文献検討

#### Summary

In this review, we analyzed papers published in the last 20 years to assess the body images of ostomy patients. Among the papers we searched Ichushi-Web, and we selected 13 papers on intestinal ostomy patients who refer to their body images. Next, we extracted descriptions referring to the body in the papers. Furthermore, we listed specific body images by interpreting the descriptions according to phenomenological perspectives. Then, we classified the patients' body images according to similarities. With regard to the ethical considerations, we cited original texts and indicated the sources.

As the results the body images of ostomy patients were as follows: <discomforting body>, <body wants to but cannot deny>, <closed body>, <body bound to the stoma>, <body differentiated by the stoma>, <fragile-looking body>, <body that takes away femininity>, and <body which feels alive>.

---

連絡先：〒761-0793 香川県木田郡三木町大字池戸1750-1 香川大学医学部看護学科 政岡 敦子

Reprint requests to: School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0793, Japan

We observed that the ostomy patients were particularly aware that they cannot be separated from their bodies through physical sensations involving negative experiences. Furthermore, we observed that the opportunity to feel alive has helped some patients to lead a positive life.

We observed that ostomy patients feel a close connection with their bodies, and this has helped to make some of them feel alive.

Keywords: Stoma, Body image, Studying papers

## はじめに

厚生労働省の調査によると、わが国における身体障害者数のうち、膀胱・直腸障害者数は135,000人と推計されている<sup>1)</sup>。年次推移から、ストーマを造設する患者は増加傾向にある。

ストーマ造設は、排泄部位と排泄処理方法の変更を余儀なくされ、手術前まで持っていた自己のボディ・イメージを大きく修正していく必要に迫られる<sup>2,3)</sup>。ボディ・イメージは、身体的側面についての自己概念であり、自己概念は絶えず主体としての自分に影響を及ぼし、その人の行動を強く方向付けるものとして機能する<sup>4)</sup>。ボディ・イメージは外界からの影響を受け、絶えず修正されていき、精神構造の発達に関係する<sup>5)</sup>ため、自己を形成していく上で重要な概念であると考えられる。

ソルター<sup>6)</sup>は潰瘍性大腸炎のため回腸ストーマ造設術をした患者を対象とし、現象学的アプローチによって、回腸ストーマ保有者の身体の部分や抑制の喪失、役割変化、ストーマの存在を隠す、社会活動の低下等、ボディ・イメージの変化を明らかにしている。そのうち、一部の対象者は、ストーマ閉鎖術を経験しており、手術前後のボディ・イメージの変化、さらに、日常生活を送ることで、ストーマ管理、人との関わり、社会活動等がボディ・イメージに影響するという、一時的ストーマ保有者の経験が明らかとなっていた。また、国内ではストーマ保有者のボディ・イメージに焦点を当てた研究は少ないが、ストーマ受容の概念の一部について、藤田<sup>7)</sup>は「新しい自己イメージを形成すること」と述べ、梶原<sup>8)</sup>は「肯定的自己概念への統合」と述べており、ストーマ受容の概念から捉えたボディ・イメージは明らかになっていることが分かる。

ストーマを造設した患者が捉えたボディ・イメージについて、研究者が臨床の場面で出会った患者は、手術直後、ストーマに対して「怖い、気持ち悪い」というような否定的な反応を示し、見ることや触れること

が困難になることもあった。しばらくすると患者は、ストーマに対して「かわいい」と話しながらケアをするといった肯定的反応を示すようになっていった。患者は、ストーマが造設されている現実に直面し、自らの身体を意識するようになり、ボディ・イメージの変化に伴って、新たな身体を経験をするのではないかと考えた。しかし、ストーマを造設した患者が、ボディ・イメージをどのように捉えているのかを明らかにした先行研究はほとんど見当たらない。そこで今回は、ボディ・イメージに焦点を当て、ストーマを造設した患者がボディ・イメージをどのように捉えているのかを明らかにすることが必要と考えた。ストーマを造設した患者のボディ・イメージを明らかにすることで、ストーマを造設した患者の主観的な身体を経験を知り、患者理解を深めることができると考えた。

## 目的

ストーマを造設した患者のボディ・イメージを先行文献から明らかにする。

## 用語の定義

ストーマ：消化管や尿路を体外に誘導して造設した開放孔<sup>9)</sup>。前者を消化管ストーマ、後者を尿路ストーマという。ここでは、消化管ストーマを指すこととする。

ボディ・イメージ：メルロ・ポンティは、相互感覚的世界における私の姿勢についての包括的な意識、私の身体が現勢的なまたは可能的な或る任務に向かってとる姿勢として私に現れる<sup>10)</sup>と述べている。つまり、身体を媒介として存在していることが重要であると考えられる。よって、ここではボディ・イメージを、身体と世界の相互作用の中で私に現れる身体とする。ここの世界とは、存在するものの総体を示す。

## 方法

## 1. キーワードおよび文献集合体の絞り方

医学中央雑誌 WEB を用いて、1993年から2012年の過去20年間でキーワード「人工肛門造設術」に「心理」または「適応」または「受容」または「体験」を掛け合わせ、看護文献、原著論文に限定して検索した。

## 2. 分析対象文献の選定

分析対象文献の選定基準は、「ストーマ造設患者を対象としていること」、「対象者の言葉で、身体の変現に関する記述内容があること」、「看護文献、原著論文であること」とした。看護文献とした理由は、ストーマ造設患者の身体の変現が詳細に記述されているためである。原著論文とした理由はデータに基づいた記述がされているためである。

この条件により抽出された文献のうち、論文のタイトルやアブストラクト、本文を読み、ストーマが造設されている患者を対象としており、ストーマ造設患者の身体の変現に関する記述内容がある文献を選定した。

## 3. 文献の整理・分析方法

1) 文献から、身体の変現に関する記述箇所を抽出した。

2) 現象学的視点を踏まえ、抽出した記述内容に表れていることを中心に、研究者が身体の変現からイメージとして感じられたことや、記述内容の解釈と合わせて具体的な身体のイメージを表した。

3) 具体的な身体のイメージの同類性により類型化し、ストーマを造設した患者のボディ・イメージとした。

4) 分析過程において共同研究者と検討し、真実性の確保に努めた。

## 倫理的配慮

文献からの引用は原典から行い、引用した文献の出典は正確に提示した。データ収集・分析は、文献の整理・分析の過程を示し、共同研究者間で検討することで公正に真実性をもって行った。

## 結果

## 1. 文献の概要

検索の結果、117件が抽出され、このうち選定基準に適合した13件(事例研究4件、質的研究9件)を分析対象文献とした(表1)。分析対象文献について、事例研究4件のうち、1件は対象者が男性のみ、3件は女性のみであった。質的研究9件のうち、1件は対象者が女性のみ、7件は両性、1件は性別の記載がな

表1 分析対象文献一覧

番号	著者	論文タイトル	雑誌名	発表年
1	前田絵美, 大石ふみ子, 葉山有香	骨盤内臓全摘術後に直腸がん患者が生活を再構築していくプロセス	日本がん看護学会誌, 26(2), 6-16	2012
2	高橋智子, 田代公美, 松山友子	一時的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討 ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して(報告1) ストーマの捉え方に関する経験について	日本看護学会論文集: 成人看護 I, 41, 198-201	2011
3	高橋智子, 田代公美, 松山友子	一時的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討 ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して(報告2) 生活に関する経験について	日本看護学会論文集: 成人看護 I, 41, 157-160	2011
4	祖父江正代, 前川厚子, 竹井留美	ストーマケアにおける患者と看護師間の相互行為と自己適応との関連性	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 14(2), 221-229	2010
5	高崎萌, 横山奈緒美, 宮部美香子	永久ストーマ造設術を余儀なくされた患者が抱えるストレスと対処行動の一考察	東海ストーマ・排泄リハビリテーション研究会誌, 30(1), 13-18	2010
6	三木 佳子	ストーマをもつ既婚女性の日常生活における困難の捉え方と対処	日本看護科学会誌, 30(1), 42-51	2010
7	祖父江正代, 前川厚子, 竹井留美	結腸ストーマ保有者の自己適応過程とそのパターン分析	日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌, 11(2), 41-51	2007
8	久保田早苗, 遠藤みどり	オストメイトの自己効力感の要因に関する研究 患者会に参加しているオストメイト3事例を通して	日本看護学会論文集 成人看護 II, (37), 156-158	2007
9	石田奈々, 田島琴香, 渡邊好恵 他	緊急ストーマ造設患者のストーマ受容に向けての援助	東海ストーマリハビリテーション研究会誌, 26(1), 97-100	2006
10	奥村恵子	空腸人工肛門となり基本的生活習慣が大きく変化した患者への精神的援助	東海ストーマリハビリテーション研究会誌, 26(1), 59-65	2006
11	松原康美, 遠藤恵美子	がんの再発・転移を告知され、永久的ストーマを造設した患者と看護師で行うナラティブ・アプローチの効果	日本がん看護学会誌, 19(1), 33-42	2005
12	山本由紀, 宇城靖子, 東尾好香 他	ストーマ造設患者の術前術後の心理状態変化 フィンクの危機モデルを用いて	STOMA: Wound & Continence, 8(3), 108-114	1998
13	平瀬加世子, 山本直子, 平山順子 他	ストーマケアによる患者心理の変化	STOMA: Wound & Continence, 7(3), 135-137	1996

かった。

分析対象文献において、対象者の造設されたストーマの種類は、イレオストミー2件、コロストミー3件、イレオストミーまたはコロストミー3件、イレオストミーまたはコロストミーまたはウロストミー1件、ダブルストーマ1件、消化管ストーマ(種類の記載なし)3件であった。対象者のストーマを造設されてからの期間は手術後から10年であった。

## 2. ストーマを造設した患者のボディ・イメージ

分析対象文献13件の記述内容から、8つのストーマを造設した患者のボディ・イメージが得られた。ストーマを造設した患者のボディ・イメージは、《違和感を生み出す身体》、《拒みたいが拒めない身体》、《閉ざされる身体》、《ストーマに縛られる身体》、《ストーマで区別される身体》、《脆さを感じさせる身体》、《女性性が脅かされる身体》、《生を感じられる身体》であった(表2)。以下に、それぞれのボディ・イメージの説明を記述する。本文中、ストーマを造設した患者のボディ・イメージを《 》、具体的な身体イメージを〈 〉、分析対象文献の本文に記述されている身体表現を「 」と示す。

### 1) 《違和感を生み出す身体》

《違和感を生み出す身体》は、手術をしたことでこれまで経験したことのない身体となり、ストーマが自分のものとは感じられず、不思議なものであり、違和感を生み出しているというボディ・イメージであった。これには〈不思議な孔のある身体〉、〈得体の知れないものが付いた身体〉、〈違和感のある身体〉が含まれた。〈不思議な孔のある身体〉は「お腹に孔があいていて不思議な感じだよ<sup>11)</sup>。」と表現しており、本来ははずの孔が腹部に存在し、不思議に感じていた。

### 2) 《拒みたいが拒めない身体》

《拒みたいが拒めない身体》は、ストーマのある腹部から排便があることを不快に思い、なくしてほしいが、拒めないというボディ・イメージであった。これには〈望まないストーマのある身体〉、〈認めたくないストーマのある身体〉が含まれた。〈認めたくないストーマのある身体〉は「無くして欲しい、もう見たくない<sup>12)</sup>。」と表現しており、ストーマは自分には必要のないもので見たくないほど嫌なものと感じていた。

### 3) 《閉ざされる身体》

《閉ざされる身体》は、他者にはないストーマのある身体となったことで、他者に裸を見せるような行動はできず、温泉旅行も制限しているため外部から閉ざ

されているというボディ・イメージであった。これには〈裸を見せられない身体〉、〈温泉旅行を制限するストーマのある身体〉、〈隠してしまう身体〉が含まれた。〈隠してしまう身体〉は「隠さなくなつていいんじゃないかと思うけれども<sup>13)</sup>。」と表現しており、ストーマを造設していることを隠したくないが実際は隠し、閉鎖的になっている身体を感じていた。

### 4) 《ストーマに縛られる身体》

《ストーマに縛られる身体》は、排泄の調節が難しく、自分の意志とは関係なく排出することや、排泄物の臭いや漏れが気になり、ストーマが頭から離れず、ストーマによって自由を制限されるというボディ・イメージであった。これには〈常に臭いが気になる身体〉、〈臭いが気がかりとなる身体〉、〈常に便の漏れが気がかりとなる身体〉、〈常にハラハラさせられる身体〉、〈常にストーマで占められている身体〉、〈大変さを感じさせられる身体〉があった。〈常に便の漏れが気がかりとなる身体〉は「漏れないかどうかはいつも気にしている。もし漏れたらとか、その間に出たらとかと思うと不安<sup>14)</sup>。」と表現しており、常に便の漏れを気にしてストーマのことを中心に考え、予期せぬ排便に振り回され不安になっている身体を感じていた。

### 5) 《ストーマで区別される身体》

《ストーマで区別される身体》は、ストーマを造設したことで身体障害者となり、他者から区別されることを感じていた。ストーマは、着衣の状態の外見では分からないことから、他の身体障害者より軽いつ感じ、他の身体障害者とも区別されているというボディ・イメージであった。これには〈障害が意識されるストーマのある身体〉、〈軽い障害のある身体〉、〈見た目では分からない障害のある身体〉、〈見た目では分からないストーマのある身体〉、〈他者から区別される身体〉、〈臭えば疎まれるかもしれない身体〉が含まれた。〈見た目では分からない障害のある身体〉は「障害者なんですよ、見た目では何もわからない<sup>13)</sup>。」と表現しており、ストーマがあることによって身体障害者となることが意識されているが、見た目では他者には分からないことを感じていた。

### 6) 《脆さを感じさせる身体》

《脆さを感じさせる身体》は、ストーマを造設してから排泄物が漏れる経験で、自分の弱さや情けなさを感じていた。さらに、ストーマはがんを思い出させるものであり、ストーマを見ることで、自分の抱えている脆さを感じるというボディ・イメージであった。これには〈ふがない自分を見せつける身体〉、〈がんであることを見せられる身体〉、〈がんと共に意識する身

表2 ストーマを造設した患者のボディ・イメージ

ボディ・イメージ	具体的な身体イメージ	本文中の身体表現	対象文献
違和感を生み出す身体	不思議な孔のある身体	お腹に孔があいていて不思議な感じだよ.	2
	得体の知れないものが付いた身体	何でこんながついたの.	10
	違和感のある身体	(ストーマを見て) 梅干しみたい, 汚い, (ストーマを見て) 梅干しみたい, なんか気持ち悪い.	12 12
拒みたいが拒めない身体	望まないストーマのある身体	お腹から便が出るなんて嫌だな.	7
	認めたくないストーマのある身体	無くして欲しい, もう見たくない.	10
閉ざされる身体	裸を見せられない身体	人前では裸になれないし, 見せられないな.	2
	温泉旅行を制限するストーマのある身体	ストーマを保有して生活している自分を見られたくないと, 温泉旅行を制限していた.	3
	隠してしまう身体	隠さなくたっていいんじゃないかと思うけれども.	8
ストーマに縛られる身体	常に臭いが気になる身体	臭うのではないかな 臭うのではないかな	4 7
	臭いが気がかりとなる身体	漏れると周囲の人に分かってしまう, 臭いと思われてしまう.	4
	常に便の漏れが気がかりとなる身体	漏れないかどうかはいつも気にしている. もし漏れたらとか, その間にいたらとかと思うと不安.	7
	常にストーマで占められている身体	常に気持ちがある(ストーマ)にある. 忘れていたときがない. 常に頭から離れたことはない.	6
	常にハラハラさせられる身体	外出先で下痢をしたらお手上げ, いつどこで何が起こるか分からない.	6
	常に気にするストーマのある身体	寝ているときでも意識的に(ストーマを)触っている.	1
	大変さを感じさせられる身体	しんどくなってきてもなかなか言えない. こんなん(ストーマ) ついてるから漏れたりしたら大変.	1
ストーマで区別される身体	障害が意識されるストーマのある身体	障害者になってしまった.	7
	軽い障害のある身体	他の障害者より軽いからいい.	7
	見た目では分からない障害のある身体	障害者なんですよね, 見た目では何もわからない.	8
	他者から区別される身体	身体障害者手帳の申請をすることで他の人に知られ, 「あの人, 袋つけている」と言われないかなと思う.	6
	臭えば疎まれるかもしれない身体	近所にストーマのある人が住んでおり, 「くさい」, 「汚い」と言われていた. 自分も他人から疎まれるのではないかと不安を抱いていた.	5
脆さを感じさせる身体	ふがいない自分を見せつける身体	(便漏れがあり, さらに創部から浸出液を認め) 汚いなあ, こんになっちゃって情けない. (装具交換方法の理解不足や未熟な手技による便漏れや対処困難の問題, ケア用品の自己調節による皮膚トラブルの問題に直面し) 情けない. (交換時には目をそらし) 情けない, 汚い.	13 3
	がんであることを見せられる身体	ストーマを見ると, 自分ががんであることを思い出す. 自分の身体のことだから忘れることができない.	11
	がんと共に意識する身体	新たながんはできるかもしれない.	6
	壊れそうなもろいものを抱える身体	(がんの再発に関して) なんとも言えないようなものをいつも抱えているような, なんかひび割れたお茶碗を持っているみたい.	1
女性性が脅かされる身体	女性としての負い目を感じさせられる身体	(性生活ができず) やっぱり自分で負い目もあった.	6
	女性としての痛みを取り繕わせる身体	主人がお前は穴という穴全部ない. だから女でないし人間でもない. 言うからわかったなあ. ほななんや. 化けもんや. 言うたら笑っていた.	1
生を感じられる身体	ストーマを意識しないでいられる身体	体の調子がよくなると人工肛門をつけている意識はなくなった.	2
	ストーマで生きられている身体	ストーマを造ったことによって命が助かった.	7
		ありがたい. ストーマで命拾った.	11
		命が助かった.	6
	ストーマを必要とする身体	ストーマはなくてはならないものだから	7
	健康のありがたみを感じられる身体	昔は健康のありがたみっていうのはぜんぜん感じていないんだよ.	8
自分を見るきっかけとなった身体	毎日の忙しさの中で, 自分を見失っていた. がんになって初めて自分を見ようと心掛けている.	11	
からだの大切さを教えてくれる身体	がんになってから気持ちが変わった, 自分の身体のことを第一に考えるようになった.	11	

体)、「壊れそうなもろいものを抱える身体」が含まれた。「(がんであることを見せられる身体)」は「ストーマを見ると、自分ががんであることを思い出す。自分の身体のことだから忘れることができない<sup>15)</sup>。」と表現しており、ストーマの存在によって、がんでストーマを造設したことを再認識することになり、がんであることを気にかけ、がんをきっかけに常に身体を感じていた。

#### 7) 《女性性が脅かされる身体》

《女性性が脅かされる身体》は、ストーマを造設することによって、女性としての役割が果たせず、負い目を感じていた。そして、身体の変化に関する女性としての痛みを感じるというボディ・イメージであった。これには「(女性としての負い目を感じさせられる身体)」、「(女性としての痛みを取り繕わせる身体)」が含まれた。「(女性としての負い目を感じさせられる身体)」は「(性生活ができず) やっぱり自分で負い目もあった<sup>16)</sup>。」と表現しており、夫婦間での女性としての性役割が思うようにできず自分の身体に罪があると負担に感じていた。

#### 8) 《生を感じられる身体》

《生を感じられる身体》は、ストーマによって、自分の命が助かり、なくてはならないものと感じていた。そして、初めて身体の大切さを教えてくれることを経験し、生きられている身体を感じるというボディ・イメージであった。これには「(ストーマを意識しないでいられる身体)」、「(ストーマで生きられている身体)」、「(ストーマを必要とする身体)」、「(健康のありがたみを感じられる身体)」、「(自分を見るきっかけとなった身体)」、「(からだの大切さを教えてくれる身体)」が含まれた。「(ストーマで生きられている身体)」は「ありがたい。ストーマで命拾いした<sup>15)</sup>。」と表現しており、自分には命があり、生きていることを感じていた。「(ストーマを必要とする身体)」は「ストーマはなくてはならないものだから<sup>14)</sup>。」と表現しており、ストーマのある身体が手術後の自分にとって必要であることを感じていた。そして、「(からだの大切さを教えてくれる身体)」は「がんになってから気持ちが変わった、自分の身体のことを第一に考えるようになった<sup>15)</sup>。」と表現しており、がんによって手術をした患者は、身体に対する認識の変化を感じていた。

### 考察

分析の結果得られた8つのボディ・イメージは、ストーマを造設した患者にとってどのような意味を持つ

のかを理解するため、各ボディ・イメージの意味が共通しているものをまとめて考察する。

#### 1. 《違和感を生み出す身体》の意味

患者は、手術後ストーマが造設された身体を感じた時に、不思議な感覚や得体の知れない気持ち悪さを感じ、否定も肯定もできないような《違和感を生み出す身体》を抱いている。トゥームズは異常な感覚体験に焦点を当て始めると、患者は身体に注意を集中し始め、そこで感じられる身体的混乱そのものが主題となっていく<sup>17)</sup>と述べている。同様にストーマを造設した患者は、違和感という感覚によって、身体を意識するようになると考えられる。

#### 2. 《拒みたいが拒めない身体》、《閉ざされる身体》、《ストーマに縛られる身体》、《ストーマで区別される身体》の意味

ストーマを造設した患者は、はっきりとしない身体の違和感から、視覚や嗅覚、触覚などの明らかな身体感覚を通して、《拒みたいが拒めない身体》、《閉ざされる身体》、《ストーマに縛られる身体》、《ストーマで区別される身体》を抱いている。これは感覚を通して身体に注目し続けることから、自分を身体に引き込むと考えられる。トゥームズは、機能不全に陥ると、基本的なことで、身体は自己自身をコントロールできなくなる。コントロールを失うと、身体と自己との共生関係が明らかになる<sup>17)</sup>と述べている。ストーマのある日常生活の中で、便漏れや排便コントロールが不良となることが少なくない。その度に苛立ちやどうしようもないといった否定的な思いを抱く。同時に身体感覚を通して、身体が常に頭から離れず気になり、その経験から自分と身体のつながりを知り、自分自身と身体は分離できないものと感じるようになると考えられる。

#### 3. 《脆さを感じさせる身体》、《女性性が脅かされる身体》の意味

患者は、排泄物の漏れや皮膚のトラブル、創傷治癒遅延が起こることで自分自身に情けなさを感じている。さらに、腫瘍によってストーマを造設した場合には、ストーマを見ることでがんであったことを想起し、がんの再発を意識するようになる。ストーマを造設する前の身体のような強さは失われ、反対に弱く、壊れそうな《脆さを感じさせる身体》を抱いている。さらに、女性として、女性役割を果たすことができないことや、身体の外見の変化による苦難を他者に伝えられ

ない経験から、《女性性が脅かされる身体》を抱いている。これらの2つのボディ・イメージは、自分の身体に起こっていることに直面することで苦難を認めていると考えられる。雲は、肝がん患者の苦難の体験について、闘病過程において数々の苦難に遭遇し、その体験の中からそれぞれの新たな生き方を見いだしていた<sup>18)</sup>と述べている。肝がん患者とストーマ造設患者では疾患の違いはあるが、両者の体験では身体的、心理的、精神的に不快な感情を伴うことは共通していると考えられる。よって、ストーマ造設患者が身体に起こる苦難に直面することで、苦難を認めることができ、共に在りながら、その先の生き方も再構築していくと考えられる。

#### 4. 《生を感じられる身体》の意味

ストーマを造設する元となる疾患やストーマを持ちながら生活する中で、患者は身体感覚としての痛みや、他者との関わりで恥を感じる経験をしている。加えて、ストーマがあることで、自分は生きており、改めて身体を大切に思うという経験をしている。ストーマを造設することで、命が助かり、健康のありがたみを再確認し、自分を見ることの大切さを再確認できている。それらを通して《生を感じられる身体》というボディ・イメージを抱き、自らの命を実感できることがあると考えられる。三輪は、人は自己の身体を、恥、臆病、痛み、恐怖のような否定的経験を通してより多く見出す、人が身体をば時に自己から切り捨てたいと思うことのある理由である<sup>19)</sup>と述べている。そうではあるが、苦難があることで自分自身と身体は切り離すことができないことを再確認できるといえる。ストーマを造設したことによって、今の身体があることに気づき、感謝していた。ストーマがあることで、否定的な経験を重ね、つらく苦しい日常もあるが、そればかりではなく、現状に感謝することができると考えられる。また、ストーマはがんであることを思い出させるものであるが、疾患を持つことによって認識が変化し、自分を大切にしたいという気持ちが表出されている。時に身体を振り返り、手術によって外見は変わるものの、それ以外に得られることがあると考えられる。このように、ストーマを造設した患者は、自らの生を感じることができた時には、肯定的に生きることができると考えられる。

#### 結論

ストーマを造設した患者のボディ・イメージは《違

和感を生み出す身体》、《拒みたいが拒めない身体》、《閉ざされる身体》、《ストーマに縛られる身体》、《ストーマで区別される身体》、《脆さを感じさせる身体》、《女性性が脅かされる身体》、《生を感じられる身体》であった。

ストーマを造設した患者のボディ・イメージは、身体と自分のつながりを感じるものであり、一部は、自らの生を感じるものであった。

#### 研究の限界と今後の課題

先行文献からの引用のため、対象者が表出した身体に関する表現の把握には限界があると考えられる。また、今回は消化管ストーマを造設した患者のボディ・イメージに焦点を当てているため、ストーマを造設した患者のボディ・イメージの一部を捉えていると考えられる。今後は、患者の経験をもとにボディ・イメージをどのように捉えているのかを詳細に明らかにする必要がある。

#### 文献

- 1) 厚生労働省 報道発表資料 統計調査結果 平成18年身体障害児・者実態調査結果、  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/index.html>, 2008/3/24.
- 2) 登坂有子：ストーマ患者の援助技術 ストーマ受容と支持的援助、看護技術, 36 (14), 1500-1503, 1990.
- 3) 木村紀美：ボディ・イメージの変容をきたした患者の心理、臨牀看護, 17 (7), 903-906, 1991.
- 4) 塚本尚子：中範囲理論入門 自己概念/自尊心感情/ボディ・イメージ, 274-287, 日総研出版, 2011.
- 5) Paul Schilder: The Image and Appearance of The Human Body Part II & III (1st ed.), 1935, 稲永和豊監修, 秋本辰雄, 秋山俊夫編訳, 身体心理学 身体のイメージとその現象 (第1版), 星和書店, 1987.
- 6) Salter MJ.: What are the differences in body image between patients with a conventional stoma compared with those who have had a conventional stoma followed by a continent pouch?, J Adv Nurs. , 17 (7), 841-848, 1992.
- 7) 藤田佳子：オストメイトのストーマの受容に関する

- る和文献の検討, 日本赤十字広島看護大学紀要, 3, 87-94, 2003.
- 8) 梶原睦子:「ストーマの受容」という概念の再考, 山梨医科大学紀要, 18, 55-60, 2001.
- 9) 日本ストーマリハビリテーション学会編:ストーマリハビリテーション学用語集, 金原出版株式会社, 63, 1997.
- 10) M.Merleau-Ponty: PHENOMENOLOGIE DE LA PERCEPTION VOL. 1 (12th ed.), 1945, 竹内芳郎, 小木貞孝共訳, 知覚の現象学1 (第12版), 174, みすず書房, 1979.
- 11) 高橋智子, 田代公美, 松山友子:一時的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討 ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して (報告1) ストーマの捉え方に関する経験について, 日本看護学会論文集:成人看護I, 41, 198-201, 2011.
- 12) 奥村恵子:空腸人工肛門となり基本的生活習慣が大きく変化した患者への精神的援助, 東海ストーマリハビリテーション研究会誌, 26 (1), 59-65, 2006.
- 13) 久保田早苗, 遠藤みどり:オストメイトの自己効力感の要因に関する研究 患者会に参加しているオストメイト3事例を通して, 日本看護学会論文集 成人看護II, 37, 156-158, 2007.
- 14) 祖父江正代, 前川厚子, 竹井留美:結腸ストーマ保有者の自己適応過程とそのパターン分析, 日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌, 11 (2), 41-51, 2007.
- 15) 松原康美, 遠藤恵美子:がんの再発・転移を告知され, 永久的ストーマを造設した患者と看護師で行うナラティブ・アプローチの効果, 日本がん看護学会誌, 19 (1), 33-42, 2005.
- 16) 三木 佳子:ストーマをもつ既婚女性の日常生活における困難の捉え方と対処, 日本看護科学会誌, 30 (1), 42-51, 2010.
- 17) S.Kay Tooms: The Meaning of illness. A Phenomenological Account of the Different Perspectives of Physician and Patient (1st ed.), 1993, 永見勇訳, 病の意味 看護と患者理解のための現象学 (第1版), 144, 日本看護協会出版会, 2001.
- 18) 雲かおり, 太湯好子:肝臓がん患者の苦難の体験とその意味づけに関する研究, 川崎医療福祉学会誌, 12 (1), 91-101, 2002.
- 19) 三輪正:身体の哲学 意味・言葉・価値, 17, 行路社, 1989.